

学生 ①

「私が目にしたアラバマ」

「Life was like a box of chocolates. You never know what you're going to get. (人生はチョコレートの箱のようなもの。開けてみるまで分からない。)」これは私が大好きな映画 Forrest Gump で主人公フォレストの母親がフォレストに人生とはどんな物か？を説明する物語の上で重要な台詞です。初めてこの映画を観た時、私は小学生でしたが私にとってこの言葉は「物事はやってみないと解らない。」と言う解釈に置き換えられ、私のチャレンジ精神の原動力と成って来た言葉だと思います。

また、映画が好きな方なら分かるかも知れませんが、Forrest Gump の舞台もアメリカ合衆国のアラバマ州であり私が研修先にアラバマ州立大学バーミングハム校を希望した理由の一つでもありました。

今回、アメリカでの歯科医療を学びに行った私には映画に出てきた様な田舎町の自然な風景をアラバマで目にする機会は少なく大学周辺の街は近代的で 日本との大差は無く、どこにでも有る街そのものでしたが、アメリカの医療の複雑な背景と日本の医療との差は私の想像を超える物でした。

デンタル IQ や医療技術が日本より高いと言われるアメリカですが、国民皆の医療保険が無いと貧富の差が口腔衛生状態にそのまま現れていて高度なう蝕、補綴されず放置された欠損、粘膜不適合でリライニングや調整が必要となってもそのまま使用を続けている義歯などを目にする事も多く、一方ではインプラントを支台としたフルオーバーデンチャーやそれらを目的とした補綴前歯周治療、最新技術を駆使した歯周組織再生療法を行っているごく一部の患者など治療内容には大きな差がありました。

この様な貧富の差がここまで医療の差になることを実感出来る機会は日本ではあまり無いと思います。また自分としてはその様な事がどの世界にも有って欲しくはありません。自分が見ることのできた範囲では日本の歯科医療とアメリカの歯科医療では保険制度の違いによる材料の違いはあれど、技術面での大差はほとんど無く、ただ憧れていたアメリカの社会的な問題をも学ぶという驚きになりました。

しかしまた、その社会問題とも捉える事の出来る医療保険も私達歯学部生としてはうらやましく思う事もありました。アメリカでは日本とは違い歯科医師国家試験において、歯科医

学に関する知識のみをではなく、臨床での技量をも問われるのですが、それに向けてアメリカの学生は歯学部最終学年である4年生において、毎日学生自身で患者を受け持ち一人で様々な治療を行っているのです。もちろん、完全に担当の教員の管理下で診療は進むのですが、今の日本では有り得ない事です。そこには先に書いた医療保険制度の有無も関わっていて、全てが自費診療となるアメリカでは先生ではなく学生が学業の一環として治療をする代わりに治療費が他の医療機関と比べて割安に成り、その結果、アメリカの学生は早いうちに患者で臨床技術を学ぶ事ができ国家試験を終えて歯科医師免許を取得してすぐに臨床の場で活躍する事ができ、患者も本来高いはずの歯科治療を安く受ける事が出来る、という非常にうらやましく上手い制度にも成っていました。

この様に実際日本にいて生活をしているだけでは解らない日本では出来ないうらやましい面が有ったり、逆に日本の医療の素晴らしい面も再認識出来たりした、意外な海外研修にもなりました。また、同年代で違う国で歯科医師を目指している学生達と交流を持ち、これからも続いていける様なコミュニケーションの始まりをこの5年生の夏休みという時期に持てた事を大変嬉しく思います。

学生 ②

「アメリカの歯科に触れて」

私がこの海外研修で学んだことはまずアラバマの文化です。アラバマの人々は、道端の知らない人でも気軽に話しかけてくれます。日本では、ほとんどみられない光景ばかりで驚きの連続でした。それが歯科の診療での患者とのラポールの形成にも繋がっているのだと思いました。私はもともと人見知り激しく知らない人と接するのがあまり得意ではありませんでした。しかし、私のホストのマイケルと交流をしたり、ホストが患者と話をしている姿をみたりして、あ！こうすれば話しやすい雰囲気を作ることができるのか、ということ学びました。アラバマの病院の経験が今の病院実習にすごく生かされていることを実感しています。

アラバマ大学歯学部の学生はすでに一般大学を卒業してから歯学部に入學するのが普通なので、私たちより年上の方が多く、病院では学生一人一人が自分のチェアを持ち、実際

の患者に対して、診断から治療まで全てを行っていました。日本の大学ではあまりないことなのでとても驚きました。

また、研修をしてとてもいいなと思ったことは、先生と学生の距離がすごく近く、活発なディスカッションが行われていることでした。なかなか難しいかもしれませんが、私も積極的に臨床実習に参加したいなと思いました。

そのほかでは、X線室にドアがなくオープンなことにも驚きました。ホストに聞くと、そんなに高い線量ではないから大丈夫とのことでした。そういったところも文化の違いなのかなと感じました。

更には、バーミングハムの街が大学と一体化していて、スクラブを着てどこへでも行けることにはとても驚きました。

観光では、HuntsvilleにあるNASAやChattanoogaのRock Cityや鍾乳洞のRuby Fallsをみたりしました。NASAでは日本では見ることのできないロケットの構造を知ることができたり、シミュレーションを体験したり、無重力を体験することができたりしました。Rock Cityでは、支えのない崖やアメリカ7州を見渡すことができる展望台からの眺めを楽しんだり、鍾乳洞内のRuby Fallsというライトアップされた大きな滝をみて大自然の凄さと神秘に癒されたりしました。Chattanoogaではホスト達と自転車を借りて街中を探索しました。とても気持ちよく楽しくて一生の思い出になりました。

ビショップ先生のお宅で、午前はプールでホストと水中バスケをしたり、湖でチュービングをさせていただいたりしました。初めての経験だったので恐怖もありましたが、とても楽しかったです。午後は文化交流を行い、日本の浴衣や甚平をプレゼントし、習字と輪投げや射的などの縁日風のことを体験してもらいました。習字ではホストの名前を当て字にして扇子に書いてプレゼントしたり、実際に書く体験をしてもらったりしました。予想以上に輪ゴム射的に喜んでいただいたので、作った私としてはとても嬉しかったです。また、女性ホストの二人のお宅に招いていただきホームパーティーをしました。アメリカではマイハウスに招くことが最大のおもてなしらしく、そういった文化を体験できたことはとても嬉しかったです。ホームパーティーでは食事を頂いたりダンスを踊ったり、とても楽しかったです。最終日のフェアウェルパーティでは研修修了の賞状をいただきました。この賞状は今でも自分の誇りです。

学生 ③

「日本と比較して感じたこと」

研修の 10 日間は私にとってはとても短い期間でした。しかし、この研修を通してアメリカの文化や習慣を少しだけ知ることができました。私がアメリカの文化、習慣を知るときにはいつも日本との比較をしていました。例えば、アラバマ大学で歯科診療を見学したときに歯科用のユニットにスピットンがなかったことです。患者の口腔内を洗うとき日本では一度チェアを起こしてうがいをしてもらいますが、アラバマ大学ではバキュームを口腔内に入れたまま水で洗っていました。私はこのことにとても驚き、受け入れ担当のフィラー先生になぜアメリカのユニットにはスピットンがないのかを聞きました。フィラー先生によると、アメリカ人は治療中に何度もうがいをしたが治療が進まなくなるためすべてバキュームで吸いとるようにしているそうです。これは、アメリカ人は自分のしたいことをいつでも伝えるが、日本人は少し遠慮しやすいということが背景にあるようです。

アラバマ大学の見学では、自分のホストが患者の診療をするのを一緒に見学するという形でしたが、もし自分の興味のある科目があればホスト以外の学生が実習している科目であっても見学をすることができました。

私は口腔外科に興味があったので、大学を見学できる日はほとんど口腔外科の治療を見学しに行きました。どの先生も、どの学生も、またどの患者も私が見学することを快く受け入れてくださり、十分に見学することができました。

アメリカへ研修に行ったことで、アメリカの文化を知ることのみならず、日本の文化や習慣を知ることでもできたと思います。例えば、バーミングハムの空港に到着したとき、私と引率の渡辺先生の荷物が乗り継ぎの空港から届いていなかったということがありました。アラバマ大学の先生方や空港の職員のおかげで次の日に荷物は届いたものの、日本ではほとんど起こらないことだと思い、日本の仕事に対する真面目さを実感することができました。

アメリカでは日本ではほとんど見られなくなったアマルガム充填が一般的に行われており、とても勉強になりました。さらに、模型を使ってのアマルガム充填の実習を実際にやらせていただき、とても貴重な体験ができました。はじめて受け入れのホストの学生と話しているとき、私の家族についてとても興味を持っていて、趣味や職業を質問されたり、ホスト自身の家族について教えてくれたりしました。また、フェアウェルパーティでは私だけでな

く私の家族の趣味に合わせたプレゼントをもらいました。このことからアメリカでは家族をとても大切にしていることがわかりました。逆に、日本では少し、家族とのコミュニケーションが少ないという気もしました。最後に私のホストのデボン・クーパー君は、荷物が届かなくて落ち込んでいる私を励ましてくれたり、一緒にバスケットボールをしたり、いろいろな日本語を一生懸命覚えてくれたりしていて、最高のホストだと私は思います。彼との関係を海外研修の期間だけで終わらせることなく、今後も遊びに行ったり、歯科医師になるものとして情報を交換したりできるような間柄になりたいです。

学生 ④

「自分の視野が広がった研修」

明海大学の大きな特色の一つとなっている海外研修という制度に私は入学前から興味があり、今回その中でも第一希望の行き先であったアラバマ大学バーミングハム校を訪問できたことは私にとって大変貴重な経験となりました。

広い敷地に多くの施設が建ち並び、充実した医療環境が整っている大学で、私は4日間、診療の見学や講義の体験などをしました。多くの時間を自分のホストと過ごし診療を見学させてもらいましたが、同じ学生という立場でありながらすでに一人で患者の診療を手際よく行なっている姿にとっても驚かされました。また診療に関する説明や質疑応答をしっかりと行なうことができる知識の豊富さ、さらに会話によるコミュニケーションを頻繁に交わすことにより患者との良好な関係を築こうとする姿勢にはとても感心させられ、特に私が見習いたいと思ったところでした。日本でも同じような光景は見かけますが、アメリカでは患者も歯科医師も会話をすることに対してより積極的に感じましたし、特に患者の治療に対する協力度や興味や意欲といったことは日本よりも高く感じられ、アメリカでの歯に対する意識の高さを実感しました。ホストの診療以外にも、口腔外科でのインプラント体の埋入や9歯にも及ぶ連続抜歯、補綴治療など他の先生が診療しているところも見せていただきました。どこを訪れても患者も先生もとてもフレンドリーで、私の突然の診療見学にも快く応じてくださいました。さらに日本では体験したことがなかったアマルガムの充填を、模型を用いて行わせてもらえたことも印象深いです。日本ではほとんど使われなくなったこともあり今まで講

義でアマルガムのことを聞く機会すらもほとんど無かったため、実物を見たのは初めてでしたし、実際に触れることができるという貴重な機会となりました。また、講義では日本と同じように先生がスライドを用いて説明し、学生は自分のパソコンでも同じスライドを見ながら講義を受ける形式でしたが、講義中に学生が次々に発言をする姿勢に学生の自ら学ぼうとする強い意欲と積極性を感じました。

研修の合間には観光として NASA の宇宙センターの見学やロックシティの散策、野球観戦や大きなショッピングモールで買い物などをして過ごしました。また浴衣をプレゼントしたり一緒に書道をしたりするなど日本の文化に触れてもらう機会もあり、ホスト達ととても楽しい時間を過ごすことができました。出発前は英語でコミュニケーションを取ることに少しの不安もありましたが、それは毎日一緒に過ごしていくうちに次第に無くなり、ホストの学生との間に深い絆を築くこともできたように思います。

実際の診療の見学をする機会がまだ日本ではほとんど無かった状態でアメリカでの歯科診療を見学させていただけたことは、私にとっても良い刺激になりました。実習で行なったことがある作業が目の前で患者に対して実際に行なわれている様子を見ながらその作業の意味や手順などを頭の中で考えていると、時々違う方法が行なわれることがあり、これが実習と臨床、日本とアメリカの違いなのだと実感させられました。今後日本での歯科診療の場でも、今回アメリカで見たこととは違うことがきっと出てくると思います。どれが正しいかではなく、なぜ違うのか、どのような意味があるのかを考えていくことが今後の私にとって重要なことだと感じています。今回の海外研修では様々な場面における日本との違いに驚かされつつも、自分の今後に活かしていきたいと思えることがたくさんあり、とても充実した有意義な時間を過ごすことができました。研修に関わってくくださった方々は勿論、特に親切にしてくれたホストの学生には感謝の気持ちでいっぱいです。

学生 ⑤

「アラバマ大学歯学部生と交流して」

アラバマ州バーミングハムに到着し、次の日からの4日間は病院見学をしました。私は、連続抜歯、インプラントの手術をそれぞれ2症例、レジン充填やグラスアイオノマー充填、

義歯の調整などを見学することができました。アラバマ大学では、教員の段階的なチェックと指導の下、3年生と4年生が実際に患者を治療しており、日本の歯学部との制度の違いを知りました。また、放射線の授業に参加させてもらったり、実習室で模型を使って窩洞形成、アマルガム充填をさせてもらったりしました。日本では使用しないアマルガムを目にするのは初めてで、更にはアマルガムを実際に操作して模型上で充填を行うという貴重な体験をすることができました。

病院見学を行い、大きく感じたことが2つあります。1つ目は、学生と教員、更には患者との距離がとても近いということです。放射線の授業では、学生が積極的に発言し、教員と学生が会話するような形で授業を進めていて、日本の大学での授業スタイルとは大きく異なると思いました。患者の治療の際にも、学生と教員はお互いに意見を出し合い、どのような治療がベストなのかを話し合っていました。その結果、患者が学生を信頼しきって治療を任せていたことは明らかでした。また、患者の多くは、傍で見学していた私にも優しく話しかけてくれ、終始穏やかな雰囲気の中治療が行われていたように思います。

2つ目は、感染防止対策を徹底して行っていたということです。アラバマ大学の病院では、手術ではなく一般の診療の際にも普段着ているスクラブの上からガウンを着用しており、ガウンは患者が変わるごとに新しいものに替えていました。また、治療の途中、近くにいる教員を呼びに行っただけで、何かに触れたわけでもないのに、その後グローブを取り替えていたことには驚きました。更に感銘を受けたのは、その感染防止対策を、教員はもちろん学生も当然の事のように無意識に行っていたということです。そのような習慣と意識が、完全に身に付いているのだなと思いました。私は同じ学生として、彼らとの意識の高さの違いを明らかに感じました。

アラバマ大学の研修では、日本の学生1人につき1人のアラバマ大学の学生がホストとなってくれます。病院にいる間や観光、食事の際にも研修の間は常にホストが隣にいてくれたのでとても心強く、様々なことを話して私たちは良き友人となりました。

病院見学以外でも、ホストの方々が様々なことを企画してくれ、色々な場所に連れて行ってくれました。湖のほとりにある先生のお宅に遊びに行かせてもらった日には、みんなで浴衣を着て書道、縁日などを楽しみました。またテネシー州のチャタヌーガに遊びに行った日には、ケーブルカーに乗り、ロックシティ、ルビーフォールズへ行き自然を肌で感じました。他にも、NASAのスペース&ロケットセンター、アイスキャンディ、ホームパーティ、トラン

ポリン、ショッピングモールなど思い出に残ることばかりです。ホストの方々のお陰で、私たち日本の学生はとても充実した日々を送り、毎日を心の底から楽しみました。

今回アラバマ大学歯学部と交流することで、医療人になることへの自覚・心構え、学ぶことへの意欲、自分の意見を持つこと、何より楽しむことなど、自分に足りないものがたくさん見つかりました。そして、それらを気付かせてくれたホストとの出会いはかけがえないものだと実感しています。このような機会を与えて下さった先生方や、引率して下さった渡辺先生に感謝すると共に、この研修での経験を生かして、これからも勉学に励んでいきたいと思っています。

最終日のフェアウェルパーティーでアラバマ大学の先生から修了証をいただいた時にはこの素晴らしい時間が終わってしまうことが残念に思えてなりませんでした。今回の研修で経験したことを将来の歯科医師としての人生に生かせるよう、これからも研鑽を積んでいきたいとの思いを新たにしました。